

ペトラルカにおける解釈の複数性

飯島 剛将（大阪大学人文学研究科（文芸学）博士後期課程二年）

発表要旨：

テキストはどう読まれるべきかという命題について、例えば中世ヨーロッパの聖書解釈学では四重義モデル（字義・寓意・道徳・神秘）を通じて意味の階層的構造を確立し、解釈の妥当性を神学的目的論に拘束した。ここでは、複数の意味は許容されるが、それらは最終的に救済史的・教義的秩序へと回収される。神学的主題に限らず、詩や古典文学の解釈においても正統な読みの根拠は問われ続けてきた。

本発表は、14 世紀の人文主義者フランチェスコ・ペトラルカ（1304-1374）の書簡集における解釈論に注目し、その方法論が「解釈の複数性」として記述できることを明らかにする。ここでいう「解釈の複数性」とは、同一のテキストが無制限に任意の意味を生むということではなく、字面に根拠をもち、かつ真理に反しない複数の読みが、作者の意図を超えて成立しようという認識を指す。本発表では Marcozzi (2002)、Fenzi (2003)、Stierle (2007) の解釈学的命題を継承しつつ、書簡テキストの精読によってその論証を精緻化する。

『老年書簡集』IV,5 においてペトラルカは、古典テキストの「隠された真の意味」を求められた際に、「知性というものには無限の相違がある。さらに、事柄そのものが、多くの、しかもさまざまな解釈を受け入れうるような性質をもっている。そうした解釈が、もし真であり、かつテキストの字面もそれを許すのであれば、たとえそれらが、その物語を作った者たちの念頭におそらく一度も浮かばなかったとしても、退けられるべきではない」と応答した。ここでは「字面の支持」と「真理性」という条件が、解釈の妥当性を定めている。重要なのは、ペトラルカが解釈の正当性を作者心理の復元に置いていない点である。解釈は、作者が実際に意図したかどうかによってではなく、テキストの字面がそれを担いうるか、またその読みが真理に反しないかによって判断される。

ペトラルカのこの立場は、例えば、作者の意図 (*intentio auctoris*)、作品・テキストの意図 (*intentio operis*)、読者の意図 (*intentio lectoris*) を区別している Eco (2016) の議論と重なる部分を持つ。こうした現代の議論と比較しながら、ペトラルカにとっての解釈が、一つの答えを取り出すことなく、複数の「こう読める」を手放さずにいることであることを示したい。

【参考文献】

U. Eco, *I limiti dell'interpretazione*, Milano, La nave di Teseo, 2016.

E. Fenzi, *Saggi petrarcheschi*, Fiesole, Cadmo, 2003.

L. Marcozzi, *La biblioteca di Febo. Mitologia e allegoria in Petrarca*, Firenze, Cesati, 2002.

K. Stierle, *La vita e i tempi di Petrarca. Alle origini della moderna coscienza europea*, traduzione di G. Pelloni, Venezia, Marsilio, 2007.

F. Petrarca, *Res seniles. Libri I-IV*, a cura di Silvia Rizzo, Firenze, Le Lettere, 2006.